

ぶらり らいぶらりい

～図書室にはこんな本があります～

No. 231



*利用者からの質問をもとに昭和館図書室の資料をご紹介します。
(書名の後の()の数字は請求記号です。)

問) 小中学生が戦争の労苦を学ぶことができる児童書(小説)を探している。

答) 昭和館の図書室には児童書の書棚があります。検索端末で探してみましよう。

図書検索 ⇒ 分類から探す ⇒ 913: 小説、物語 ⇒ 199件ヒット

「検索対象」では「和書」と「開架」の項目にを入れてみてください。
「開架」とは閲覧室に並んでいる書棚のことです。



児童書以外の小説も含まれているので、児童書の小説のみに絞り込みます。

+絞り込み検索 ⇒ ことばで絞り込む ⇒ 児童書 ⇒ 162件ヒット

読んでみたいテーマで検索することもできます。

+絞り込み検索 ⇒ タイトルで絞り込む ⇒ 東京大空襲 ⇒ 2件ヒット

◆ 『絵本東京大空襲』 913/Sa67 (開架児童書)

◆ 『せんそうってなんだったの? 第二期 5』 913/Ta93/5 (開架児童書)

+絞り込み検索 ⇒ タイトルで絞り込む ⇒ 疎開 ⇒ 3件ヒット

◆ 『お母ちゃんお母ちゃーんむかえにきて』 913/054 (開架児童書)

◆ 『わたしたちの戦争体験 4』 913/Ta93/4 (開架児童書)

図書室には、書棚に並んでいる図書以外にもたくさんあります。
検索端末を使って、読みたい本を探してみてください。
操作方法等、カウンター職員までお気軽にお問い合わせください。

マスクのはなし

毎年、冬から春にかけて流行する風邪・インフルエンザの予防や花粉症対策に欠かせないマスク。今年も新型コロナウイルスの流行により、店頭での品切れが続出し、ニュースでも大きく取り上げられています。

マスクは明治時代に主に^{ふんじん}粉塵よけとして流通するようになりました。しかし、着用していると呼吸器が弱く肺の病気を患っていると思われることから、当初は使用する人は少なく、売れ行きもあまり良くなかったようです。

しかし大正8年(1919)にスペイン風邪(インフルエンザ)が大流行すると内務省が予防のためにマスクの使用を勧める注意を出す事態となり、さかんに用いられるようになりました。そして昭和15年(1940)発行の『厚生 第65号』では「遂には装身具の一つの様になった」といわれるほど市民の間に普及していきました。

今ではマスクは不織布製が主流というイメージがありますが、初期は^{しんちゆう}真鍮製の金網を芯に布地がフィルターとして取り付けられたものでした。その後、芯にセルロイドをフィルターに^{べっちゃん}別珍や革を使用したもの、ガーゼ製のものなどが登場し、次第に現在の形状まで改良が進められました。

また色といえば真っ先に「白」を思い浮かべる人にとっては少し意外かもしれませんが、昭和のはじめごろは黒地のマスクも使用されていました。(図1)

近頃は水色やピンクなどのカラフルな色とともに黒のマスクも販売されるようになっていきますね。

著作権があるため掲載できません。

図1『家庭 第3巻第2号』
大日本連合婦人会 昭和8(1933)年2月

著作権があるため
掲載できません。

戦時中は空襲の毒ガスから身を守るために防毒マスクが各家庭で用意されるようになります。物資が不足し市販のものが入手しにくくなると、手持ちの材料を使って手づくりすることもあったようです。

また、隣組などで行われる防空訓練や救護訓練の際には、現在使用されている形状に近いマスクも使用されていました。(図2)

◆参考文献◆

『日本衛生材料工業会ホームページ>マスクについて>マスクの雑学編』
(<http://www.jhpie.or.jp/product/mask/mask3.html>)

『朝日グラフ 第20巻第4号 昭和8年1月25日』(051/A82/1933-1 閉架雑誌)

『厚生 第54~65号(昭和15年1月~12月)』(317/Ko83/54-6 雑誌)

『ものしり事典 醫薬篇』(031/H62 閉架一般)

『消印は知っていた 幕末から明治・大正・昭和の“たより、が綴る庶民医療史”』
(498/Ma61 地下書庫和図書)

『婦人手帳』大日本婦道実践報国会
昭和18(1943)年

ぶらりらいぶらりい ~図書室にはこんな本があります~ NO. 231

2020年3月20日 発行/ 編集・発行 昭和館 図書室 〒102-0074 東京都千代田区九段南1-6-1